

[セッション II]

「暫定空間の記憶芸術—ベルリンとボゴタに見る場所に根ざした芸術実践」

カレン・ティル（ヴァージニア工科大学准教授）

アーティストたちは長い間、市当局がマージナルと分類する景観の中で、またそうした景観を使って仕事をしてきた。マージナルな景観は、見捨てられ、廃墟と化し、価値がなく、そして国家に対する脅威とさえ思われている。しかしそうした景観の持つ外観、物語、空き地、身体など、市当局が「場違い」で撤去が必要とするものは、建物を取り壊したり、土地利用計画地図を変更しただけで簡単に消えはしない。記憶の名残としてそれらはいつまでも存続し、他の時空間的な記憶に亡霊のように取りつく。本発表は、現象学者エドワード・ケーシーが「溶けることのない記憶の遺物」と呼ぶものに取り組み、そこに生命を吹き込み、折り合いをつけようとする、公共空間を利用したアーティストたちの作品を分析する。2006年にベルリンで開催された『ハンナー・アーレント—思考空間』展と、2009年にコロンビアのボゴタで発表されたビアトリス・ゴンザレスとドリス・サルセドによる、『無名のアウラ』の2つのアート・プロジェクトは、それぞれかつてのユダヤ人女学校と墓地を再生させ、厄介な国民的過去を、より社会的で公正な未来に結びつけている。アーティストたちはこれらの場所と関わりのある社会的儀礼に息を吹き込み、身体的記憶を通して、困難な社会問題に関する批判的な内省を促す。記憶の遺物を探査する創造的なプロジェクトは、訪問者に、予期せぬ方法で学校の空間（前者）や死者を追悼する公的な場所（後者）を巡らせることで、責任ある市民となることを求め、過去における国家の暴力の結果としての喪失、トラウマ、痛み、不正とともに生きるという困難なプロセスの認識を要請する。本発表はツーリズム、記憶、美術史の研究者たちが、これらの溶けることのない記憶の遺物が、いかに、過去、起こり得る未来、そして都市の主観性を認識し、また想像するための、多感覚的で、空間的で、儀礼的で、身体化された方法を形成し続けるかを、真剣に考える必要性を訴える。